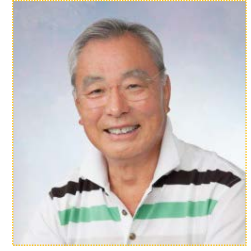




楽しき哉！スキューバダイビング

佐藤 眞樹（元）新日本製鉄



3月に1週間**モルジブ**にダイビングに行ってきた。モルジブは東西118km、南北754kmの海域に26もの環礁があり、各々に素晴らしいダイビングスポットがあるので、良いところ取りをする為に、「プリンセス・ハッシーナ号」と言うクルーズ船に乗って、各地のスポットを回って楽しんで来た。モルジブは今まで潜った中で最高のダイビングスポットの一つと言っても良い。もう百回近くも通っている猛者も居る程である。

ジンベイザメ、マンタ、シャーク、ウミガメ、ローニンアジ、イソマグロ、バラクーダなどの比較的大物からサンゴ礁で群れ踊るカラフルなアカハナゴイ、辺りがぱっと明るくなるような黄色の縦縞の美しいベンガルフエダイの群れ、岩の合間から湧き出して来る様なブルーと黄色の対比の鮮やかなパウダーブルーサージョンフィッシュの大群、日本では夢色もどきと称されるイエローバックフュージュラーなどと圧倒的に種類も多いし、魚影も濃い。

ジンベイザメはセブ島のオスロブで何度かお目にかかったが、そこでは毎朝、オキアミなどを漁師が海に撒き、餌を求めて何頭ものジンベイザメがやって来るのを眺めるやり方で、確実に見られると言うことで、最近では韓国、台湾からの観光客も多く、些か興奮めの感が有る。モルジブでは大海原を2日ばかりで探し回り、やっと見つけるとゴーグルを着けて一斉に海に飛び込み、競争するように近くまで泳ぎ、その10メートルを超える甚平模様を捉えた瞬間、あっという間に海の彼方に消えてしまうと言う訳で、遭遇した時の喜びが違う。

マンタは通常は、クリーニングと言って海の中の大きな岩根の頂上でベラなどの小魚に体に付いた虫などを食べて貰うためにやって来るのを待ち伏せて見るのだが、今回は3畳から4畳半はある南洋マンタが目の中の岩根で2頭も一緒に、かなり長い間ホバリングしており、荘厳さすら感じさせる、正に息を呑む眺めだった。特に

小さめの1頭は時々定位置から泳ぎ出し、自分の直ぐ横を通って元の位置に戻るなど至近距離で動画も沢山撮れ、最高だった。



(クリーニング中のマンタ2頭)

グレートバリアリーフで中層を真正面の方向から泳いで来て、私に気付く、右にゆっくりと旋回して行ったマンタに遭遇した時以来の興奮だった。

サメに遭ったら怖いだろうと良く言われるが人間を襲うサメは500種程居るサメの中でホホジロサメやイタチザメ、オオメジロザメ、シュモクザメなど数種類に限られている。サメに襲われる確率は1億分の1位で、その6割が餌のアザラシなどと間違えられやすいサーファーと言われている。我々が目にするサメはグレイリーフシャークやホワイトチップと言われる種類で、体長は優に3~4メートルはあるが、極めて用心深く、サメの方から近づいてくることは無い。



(グレイリーフシャーク)

深いドロップオフへのきざはしの崖っぶちにフック

を掛けて強い流れに身を任せながら、凧の様に浮いている目の前を十数匹のグレイリーフシャークが次々に泳ぎ来たっては去って行くのを眺めるのは、そうは言っても恐怖感も手伝い、極めてスリリングである。

私がダイビングを始めたのは丁度10年前の67歳の時。前から憧れていたが、始める切っ掛けが無かった。2度目にお世話になった会社の仕事も卒業し、先輩の薦めで入会した一般社団法人Direct Forceに、スキューバ同好会が有り、即入会した。

ダイビングをするにはPADIなどの国際認証機関の試験を受け、許可証を取らねばならないが、私の場合は同好会の仲間と行ったセブ島のダイブハウスで追加費用3万円で、2日半の実技訓練と座学で許可証を取得した。3日目の午後には仲間と一緒にスミロン島で初めてのダイビングを楽しむことが出来、海の中の美しさに完璧に魅了された。キラキラと輝く太陽の光が水を通して色とりどりのサンゴ礁の周りで群舞する赤や黄色の熱帯魚達を一層カラフルに際立たせ、正に竜宮城とはこのことかと思った。

それから毎年2~3回のペースで、3月と10月は暖かい海外、7月は沖縄と潜り続けて来た。伊豆や近海で潜る人たちも多いが、我々は薄いウエットスーツ(3mm)で潜れる暖かい海で且つ、重いタンクを背負って歩くビーチダイビングは避けて、ボートから飛び込めるやり方に拘って来た。

これまで23回のツアーで230回程潜った。沖縄に7回、セブ島に6回、パラオに5回その他、タヒチ、サイパン、タイ・シミラン諸島、オーストラリア・グレートバリアリーフやモルジブ等々。

ダイビングは大体1回当たり40~50分位を1日3回程潜るのが普通である。深度は40メートルまで潜れる許可証は持っているが、普通は20メートル位まで。余り深いと太陽の光が届かず、赤色まで黒く見え、綺麗ではない。

我々の仲間は平均年齢が優に72歳を超えているので、体調が悪かったり、その気にならなかつたら、その時は潜らないと言い切る勇気を大切にしている。「止める勇

気」である。

セブ島・サンタンダールのルビ・リゾートは我々同好会メンバーの心のふるさとと言った場所で3人が許可証を取ったり、アップグレードをしたり、ホテルやダイブハウスのオーナーに大変お世話になったところ。マゼランが殺されたマクタン島で飛行機を降りてから何と4時間近く神風タクシーの確実に上に行くスピードとテクニックで町中や田舎のくねくね道を人やジムニー(3輪車のタクシー)を避けながらすっ飛ばしてやっと辿り着く。

ダイビングスポットの数は極めて多く、透明度も20メートル以上と美しく、サンゴ礁もとても色鮮やかで、ハナゴイやパープルビューティ、ハナダイなどがとても美しい。近くにはマイワシの何万匹と言う大群が朝、深海からプランクトンを求めて一斉に上がって来るポイントも有り、遠くから見るとまるで真っ黒な竜が雲となって空をのたうち回っているようであり、その大群の中に飛び込んで行くと、銀色に光る鱗を一斉に光らせながら右へ左へと流れて行き、一匹一匹の顔まで良く見える。

ギンガメアジの群れを見たい時は走る双胴船の間に渡した竹竿に現地のスタッフが捕まり、ゴーグルを掛けて顔を水につけ、群れを直接探す言わば人間魚群探知機まで使って見せてくれる。その熱意が物凄く伝わって来る。

近くのオスロブではジンベイザメの群れがオキアミなどの餌を求めてやって来るのを利用して餌付けに成功、10メートル近くあるジンベイザメを簡単に海の中や上から見る事が出来る。



(オスロブのジンベイザメ)

クマノミや多くの熱帯魚はオカマだと知ったのもセブ島だった。群れの一番大きな個体が雌で、2番目に大

大きい個体が雄、他は予備軍。雌が死んだりして居なくなると雄だった個体が雌になり、予備軍の一番大きな個体が雄になり、種を保存するのだそうだ。

セブ島の次に数多く通ったのは**パラオ**である。日本から直行便で4時間。町の小さなホテルに泊まり、毎日ダイブハウスから高速ボートでいくつかのポイントに行き、潜るやり方と「竜馬」の様なクルーザーに乗って船の中に寝泊まりして潜るやり方が有り、幸い両方のダイビングを楽しむ機会に恵まれた。パラオは戦争前は日本の委任統治領で、ペリリュー島の戦いで米軍の攻撃に日本軍は玉砕したが、島の人達をコロール島に全員避難させたことへの評価も有り、極めて親日的な国である。独立後、日系の大統領が3人も出たり、国旗も白地に赤丸に似せて太平洋の青地にお月さまの黄色い丸と言う具合。日本との時差も無いし、平成天皇が慰霊に行かれたことも記憶に新しい。

コロール島付近ではジャーマンチャンネルでのマンタやブルーコーナーでのグレイリーフシャーク、ナポレオンフィッシュやバッファローフィッシュと異名を取るカンムリブダイなどの大物に遭える。流れの物凄く早いペリリュー島では、ダウンカレントに巻き込まれ死ぬかと思いつつも、バラフエダイの一斉産卵を見ることが出来た。大潮の朝、何千匹ものバラフエダイが岩棚に集まり、突然、1匹の雌が海面に向かって泳ぎ出すと7~8匹の雄が追いかけて、産卵に併せ放精する。海が精液でミルク色に染まる様は美しかった。



(9/17の写真を撮る筆者)

だが何と言ってもマイちゃんと言う魅力的なインストラクターが居たのが懐かしい。ナイスバディーの色黒のキリっとした顔立ちの女の子で、たちまち我々のアイドルになった。70過ぎたお爺ちゃん達が現地の若者と

結婚すると言う彼女をそれだけは止めるとか余計な口出しをし、翌年、桃太君と言う可愛い男の子が生まれれば、次に行った時に日本からの御菓子をお土産に持って行くなど、潜るだけではない楽しさも有った。皆一瞬、青春を取り戻すのかも知れない。

魚影が濃いという点ではタイのシミラン諸島の北、ミヤンマーに近い**リチュリュウロック**というポイントではアカヒメジやローニンアジ、ギンガメアジなど余りにも沢山の魚の群れが我々を取り囲み、魚と魚の間にやっとな水が見えると言う有様。又シミランは兎も角、ここだけには是非戻って来たいと言う思いが皆の共通の思いだった。リチュリュウとはルイ13世に仕えた三銃士と対決する宰相リシュリュウの英語読みで、紫色のソフトコーラル(生サンゴ)がロックを取り巻く様が紫色のマントを身にまとったリシュリュウを彷彿とさせる言うことで付いた名前だそうだ。

昨年11月、我々の長年の夢だったオーストラリアの**グレートバリアリーフ**(GBR)でのダイビングが実現した。GBRはオーストラリアの北東岸2600キロにわたり連なる世界最大のサンゴ礁地帯で珊瑚海に在り、世界遺産にも登録されている。現在生育しているサンゴ群は最終氷期の最終期である2万年前から生成が開始したとされている。今では1500種程度の魚が住んでおり、サンゴは何と400種が確認されている。

ケアンズからセスナ機でリザード島まで飛び、待機していた「Spirit of Freedom号」と言う豪華クルーザーでアウターリーフの外まで行って潜った。見たもの全てが感動的だった。特にシャークフィードは圧巻だった。我々ダイバーが水深15m位に在る岩の上に腰かけて待っていると、マグロの頭を4個入れた鉄製のカゴが船から降りて来て、その匂いで何十匹と言うサメが集まり、カゴの周りをグルグルと遠巻きにして泳ぎ回わる。おこぼれにあずかろうとするバラフエダイやたくさんの魚がカゴの近くで待ち構える。インストラクターの一人がカゴの蓋を開けると同時に一斉にサメ達が餌を求めて競い合う様は圧巻だった。

タヒチツアーでは常日頃男達だけで勝手に出かけてしまうことにご不満だった奥様方もお誘いして新婚旅

行のメッカであるボラボラ島まで出かけた。新婚さんに大人気の水上コテージなるものも経験してみたり、本島の市場でのお祭りに参加したり、ゴーギャンの記念館に出掛け、役人としての彼の非道振りに呆れたりもした。

クルーザーで潜る場合は特にヨーロッパやアメリカから来るダイバー達と一緒に船上生活を送ることになり、他国の人達とのコミュニケーションが求められる。最後の晩などは欧米人はお酒を呑んで、歌ったり踊ったり大変な騒ぎだが、日本人は静か。日本にはこんな時、皆で大合唱できる元気の出る歌が余り無いのに気づき、美しい歌や、もの悲しい歌は沢山有るのに何故だろうなどと考えさせられたりした。中国本土から来た若夫婦と親しくなり、金持ちではないと主張する彼ら中国人庶民もダイビングに手を染める位、趣味も豊かになったのだなとつくづく感心した。

毎年夏には**沖縄**の慶良間、石垣や西表、久米島などで潜る。サンゴ礁は何処にも負けない位、色鮮やかで美しい。熱帯魚達は正に竜宮城を目の前に見せてくれ、石垣



(ハママシの家族)

島ではマンタに逢える、粟国ではローニンアジやイソマグロの群にもお目にかかれる。ダイビングスポットとしては全く見劣りしない。次第に遠いところまで飛行機に乗るのがしんどく成る我々の将来のお気に入りのスポットになること疑いない。

ダイビングは大変体力の要るスポーツとされている様だが、手足の不自由な方や86歳のおじいちゃま、おばあちゃまにも出来る位、体力を使わないスポーツである。体の不自由な人には特に水の中は浮力も有り、むしろ体に優しいスポーツと言えよう。

水中で何処にも捕まらずに息遣いだけで体を一寸浮かせたり、沈ませたりして、同じ位置を維持する、所謂、中性浮力を身に付けることが技術的ポイントで、体力はそんなに関係ない。空気の入ったボンベを担いでいるので呼吸は何も問題ないし、BCと呼ばれる浮袋みたいなものを体に巻き付けているので沈み始めたらボンベから空気を入れれば良いし、意に反して浮き上がり始めたら、逆に浮袋の空気を外に逃がしてやれば良く、それはボタン一つで操作可能である。

ボンベは結構重いが、腰の悪い人や力のない人はボンベを海に入ってから脱着すれば重い思いをしなくても済む。比島などはダイバーは何もしなくても全てスタッフがやってくれる殿様ダイビングを売りにしているところも有る。

是非皆さんもダイビングに挑戦してみてください。今まで全く見たことが無い美しい世界が貴方を待っています。正に楽しきかな！スキューバです。

今まで潜った動画をIBMのOBであるDirect Forceの先輩に編集して貰いYOUTUBEに投稿して来ました。今や10本以上になります。「どこどこダイビング紀行」で検索して戴けるとご覧になれます。

文章で長々と書きましたが、海の中の素晴らしさは書き尽くせません。百聞は一見に若かずです。以下に題名と制作年を書いておきますので、是非、動画をご覧戴き、海の中の美しさを満喫して戴ければ幸甚です。

以上

パラオダイビング紀行 2013、2014、2015、2016
 石垣島ダイビング紀行 2013
 セブ島ダイビング紀行 2013、2014、2017
 シミラン諸島ダイビング紀行 2018
 グレートバリアリーフダイビング紀行 2018
 モルジブダイビング紀行 (制作中) 2019